まちづくり①

「おだずもっこ」な人たちのいかだ下りと千灯供養会

宮城・丸森町　舘矢間まさか団

「舘矢間まさか団」(代表・横山修一さん)は、昭和二十七年生まれの小学校、中学校の同級生が中心になって結成されて十五年。「まさかこんなことはしないだろう」というアッと驚くことをしてやろうと、「まさか団」と名付けた。「おだずもっこなあの人たちがやっているんだからオレたちも…」と住民に対するむらおこしの起爆剤になれば、との願いも込められ結成した。「おだずもっこ」とは土地の方言で「お調子者」のことだ。

そんなまさか団が、阿武隈川のいかだ下り大会に参加したのが七月二十九日。

宮城県丸森町から角田市までの十四キロメートルをいかだに乗って下っていくレースだ。愛好者数名が始めたこのいかだ下り大会も、今年で二十回目を数える。

タイムを競う「スピード部門」、川を下りながら阿武隈の自然を楽しむ「自然満喫部門」、そして思い思いのアイデアを凝らしたいかだの「仮装アイデア部門」に、角田市・丸森町内はもとより、茨城や千葉、山形からの参加者もあり、総勢八十三チームが阿武隈川を下った。

まさか団は毎年仮装アイデア部門で参加を続けている。入賞の常連チームだ。

今年は、秋に開催される宮城国体のマスコットキャラクター「けやっきー」をモデルにしたアイデアいかだで出場した。五月から毎日曜日にメンバーがコツコツと作ってきたいかだだ。

いかだの総製作費は十八万円とのこと。「ただしそのうち十万円が飲食代だよ」と横山さん。この言葉がまさか団を象徴していると気づいたのはもう少し後のことだった。

例年より水量の少ない阿武隈川。大きないかだは重機に引きずられながら流れに乗せてもらい、ようやくスタートした。しばらくはゆっくりと川下りを楽しむ時間だ。土手からは観客が手を振っている。メンバーたちは冗談を炸裂させながら缶ビールを煽る。

ガリガリガリ。やがてイヤ～な音が船底から…。「さて押すべ」の声。いかだ下りは一転いかだ押しに早変わり。全員膝丈ほどの川に飛び降りいかだを押す。こんなふうに「難所」を切り抜けること数回。出発から五時間後ようやくゴールに到着した。

今回は優勝を狙ったが、定員オーバーなどの減点が響き、残念ながら六位（賞金一万円）。その晩は悲喜こもごもの打ち上げとなったとか。まさか定員オーバーとは…。

八月十八日には「盂蘭盆千灯供養会」というまさか団が今年から始めたお盆の行事が執り行われた。松掛地区の墓地に千本のろうそくを灯して先祖の霊を弔う。

端材に釘を打ち付けろうそく台にしたものを、墓という墓、道という道に置いていく。千本のセッティングが終わると、とりあえず缶ビール

が配られる。「うちの入団試験は難しいよ」とメンバー。なぜだ？「一緒に酒飲んで面白くないヤツはダメ」さらに、素面の時のアイデアは採用しない。現実的なアイデアばかりになるからだ。しかし、いざ取り掛かれば必ずやり遂げる。「失敗した時はその時。とにかくオレたちは楽しみたいんだ」と菊池修一さん。酒は潤滑油とよく言われるが、ここでは酒はすでにメンバーの一人なのかもしれない。

夕闇が迫った頃千本のろうそくに灯りが灯った。三々五々地区の住民が集まってきて、しばしろうそくが創り出す幽玄の世界に触れている。一人の老人がポツリと言った。「まさか団の人たちには、いいことをしてもらって感謝しているよ」

まさか団が主催しなくても、松掛の住民には「オレたちがやらねぇと」という気持ちが芽生えたようだ。こうしてまさか団の取り組みは、新しい伝統として地域に根付いていくに違いない。

アッと驚かせようというまさか団の相談役佐藤良治教育長は言った。「今度は山に火をつけっぺ、なんてのはやめてけろよ」もしかするとメンバーに良いアイデアのきっかけを与えてしまったかもしれない。いや、さすがに山には火はつけまい。まさか…。

■連絡先＝宮城県伊具群丸森町
舘矢間字坪石二一―四
TEL〇二二四―七二―一〇三六